

小学校1年生における登り棒の段階的指導法について

— About the graded instruction method of the climbing pole in the first grader —

松岡 哲雄

要 旨

幼児期の身体運動ガイドライン「幼児期運動指針」には、幼児期に経験する基本的な動きの例として、登るという動作が、登り棒を登るイラスト入りで紹介されている。

小学校低学年の教師用指導資料、「小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック」の内容にも「幼児期運動指針」の内容を発展させた登り棒の運動が紹介されている。

しかし、小学校1年生でこの登るという動作はおへそを登り棒にくっつけることが出来なかつたり、足を登り棒に挟むことが出来なかつたりして登るのに苦慮している児童が多くいた。できない子どもたちにインタビューをすると、幼児期からできないということだった。登り棒は、できる、できないがはっきりおり、苦手意識のある児童が多い。

以上のことから、登り棒が苦手な子どもも達成感の味える、登り棒の指導の仕方を検討した。平均台を使ってまず横に移動する動作だけを習得し、徐々に跳び箱を使って平均台に傾斜をつけ、登り棒に近付けていく場の設定をした。この段階的指導法を行うことによって、登り棒に対する苦手意識がなくなり、取り組む意欲を向上した。

キーワード：登り棒、段階的指導法

1. はじめに

幼児教育と小学校教育との連携を推進すべく、2008年改訂の保育所保育指針¹⁾と幼稚園教育要領²⁾には小学校連携に関する内容が盛り込まれた。また、小学校学習指導要領においても幼稚園に加え保育所との連携が新たに加えられた³⁾。

1985年から2008年まで幼児において体力低下が続いており、運動能力の2極化も問題になっている⁴⁾。2011年4月より全面的実施となった、小学校学習指導要領体育科の「改善の具体的事項」の一つとして、運動領域については、幼児教育との円滑な接続を図ること、体力の低下傾

向が深刻な問題となっていることや積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化への指摘があること、各学年の系統性を図ることなどを踏まえ、低学年を「体づくり運動」、「器械・器具を使っての運動遊び」、「走・跳の運動遊び」、「水遊び」、「ゲーム」及び「表現リズム遊び」で構成された⁵⁾。また、「器械・器具を使っての運動遊び」、について教師用指導資料「小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック低学年（第一学年及び第二学年）」（2011）には、登り棒を使った運動遊びの例示として、登り下り、逆さ姿勢などがイラスト入り（図1）で紹介されている⁶⁾。

小学校1年生における登り棒の段階的指導法について

また、2012年4月には幼児を対象に、幼児期の身体運動ガイドライン「幼児期運動指針」が策定された⁷⁾。それらは「体のバランスをとる動き」「体を移動する動き」「用具などを操作する動き」の3つに分かれおり、それらを経験し多様な動きを獲得することが望まれている。その中の「体を移動する動き」の中には登る(図2)の動作もイラスト入りで紹介され、教師用指導資料「小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブック低学年(第一学年及び第二学年)」の内容と系統性を保った内容となっている。

しかし、おへそを登り棒にくっつけることが出来なかつたり、足を登り棒に挟むことが出来なかつたりと、「幼児期運動指針」で獲得することが望まれる登る動作そのものが獲得できていない児童が多数いた。登り棒ができない子どもたちにインタビューをすると、幼児期からできないということだった。登り棒が好きか嫌いかのアンケートを実施したところ、1クラス22名の1年生の内9名(41%)が好きと答え、嫌いは13名(59%)であった。また、学習前は登り棒におへそをくっつけての支持ができない児童が7名(32%)いた。

登り棒は、跳び箱などと同じようにできる、できないがはっきりおり、苦手意識のある児童が多い。

橋本(1999)⁸⁾は、年長児を対象に5月と3月に鉄棒4種目(足抜き回り、尻上がり、前回り、逆上がり)、登り棒、雲梯の運動成就率を調査し、登り棒の運動成就率が一番低くかったと報告している。

また柳田(2008)⁹⁾は、埼玉県の公立および私立幼稚園にアンケート調査を依頼し、20園、202名の教師が調査対象(アンケート回収率は62.9%)を行った。

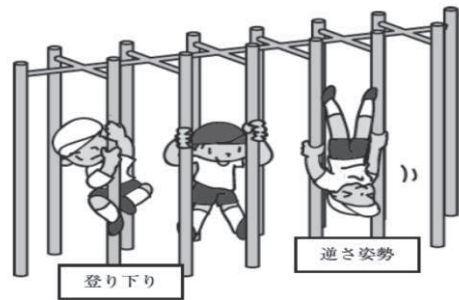


図1：小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブック(低学年)文部科学省(2011)



図2：幼児期運動指針：文部科学省(2012)

運動遊びの指導に際して重視していることの調査においては、幼児と一緒に遊ぶことや外で自由に遊ばせることが重視され、運動技能やルールなど運動遊びを体系化した運動指導の必要はないという考えが幼稚園教員には強いことが明らかにされた。小学校の登り棒の指導に関する先行研究を学術情報データベースCiNiiで検索したが、小学校の登り棒の指導に関する研究はなかった。

以上のことから幼児期運動指針の中で獲得が望まれている「登る」という動作習得は、小学校1年生のカリキュラムでも必要だと考え、また運動遊びの重要性は、教師用指導資料「小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブック低学年(第一学年及び第二学年)」などでも述べられていることから、登り棒が苦手な子どもも達成感の味あえるカリキュラム構成を検討した。

表1：単元名：登り棒に挑戦しよう

| | ジャングル探検をしよう (サーキット遊び) | | 登り棒で遊ぼう |
|-----|--|--|--|
| 時間 | 1 | 2 | 3 |
| ねらい | <ul style="list-style-type: none"> ・平均台におへそをくっつけて移動できる ・引き付け動作ができるようになる | | <ul style="list-style-type: none"> ・登り棒におへそをくっつけて支持できる ・登り棒に登れる |
| 内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・モノレール（徐々に傾斜をつけていく） ・レンジャー部隊（縄に団子をつけておく） ・ワニ歩き | <ul style="list-style-type: none"> ・モノレール（傾斜を寄り付けて） ・レンジャー部隊（仰向け、うつ伏せ） ・ワニ歩き（コーンで高さに制限） | <ul style="list-style-type: none"> ・登り棒で支持遊び ・登り棒でどこまで登れるか挑戦（色テープを等間隔で貼っておく） |

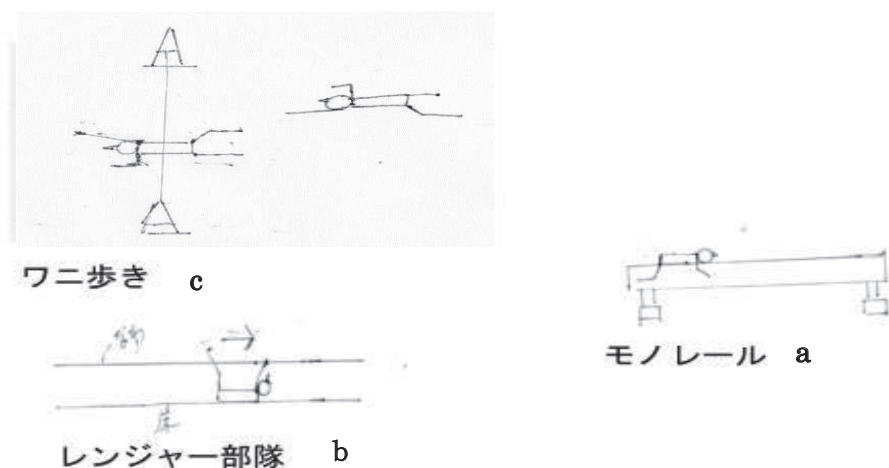


図3：ジャングル探検（サーキット遊び）

2. 方法

調査対象は、大阪府内の1年生24名（男子12名 女子10名）実施時期は、2010年6月、時間数は3時間、学習前と学習後で登り棒の達成率と好嫌度のアンケートを実施した。

単元名は「登り棒に挑戦しよう」とした（表1）。

1、2時限目は小単元として「ジャングル探検をしよう」として行った。モノレール（図

3-a）だけをする待ち順番の時間ができるため、運動量を確保することと、登るという動作を習得させる意図で類似性運動（アナログン）でサーキットを組んで行った。

レンジャー部隊（図3-b）は、背中を床につけて足を上げ、手だけで前へ進ませる場を2本つくり、1本は苦手な子どもでもできるように、なわに団子を作って力が無くても移動しやすい場とした。また、2限目は、子ども達の発想も

小学校1年生における登り棒の段階的指導法について

取り入れ、おへそを床にくっつけて腹ばいの姿勢でのレンジャー部隊などにも取り組んだ。

ワニ歩きは(図3-c)慣れてくると、2限目からはコーンをいくつか用意してゴムを張り、ゴムに当たらないように行わせた。これは、床におへそをくっつけて進むことで、モノレール(図3-a)のおへそをくっつけて進むことへの繋がりを考えて行うものである。

登り棒に関しては、登り方が2通りある。一

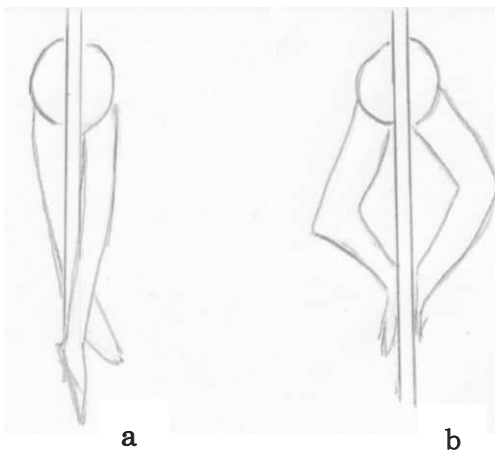


図4

つ目は図4-aの様に、登り棒に足を絡める登り方である。2つ目は、図4-bのように、登り棒を両足の裏で挟み込み登る方法である。図4-aの足を絡めて登る方法は、太腿、ふくらはぎ、足首を登り棒に巻き付けながら、手で身体を引き上げるため、腕の力が必要で、さらに長ズボンや靴を履いていると、滑りやすい。図4-bでは、手で身体を引き上げるのと同時に、足の力を利用し、素足の足の裏で登り棒を挟みながら、身体を持ち上げることから、図4-aの方法より手に力がなくても登りやすいと考えた。また平均台の側面に足を挟み移動することで、徐々に傾斜をつけて行うことが可能なので、スモールステップで達成感が味わえる教材として実践できると考えた。

平均台の場の設定についてだが(図5)まず、登り棒を横に倒したイメージで、平均台を使って、横に移動する動作だけを習得させた(図5-a)。

その後、徐々に跳び箱を使って平均台に傾斜をつけ、登り棒に近付けていく場の設定をした(図5-b,c,d)。

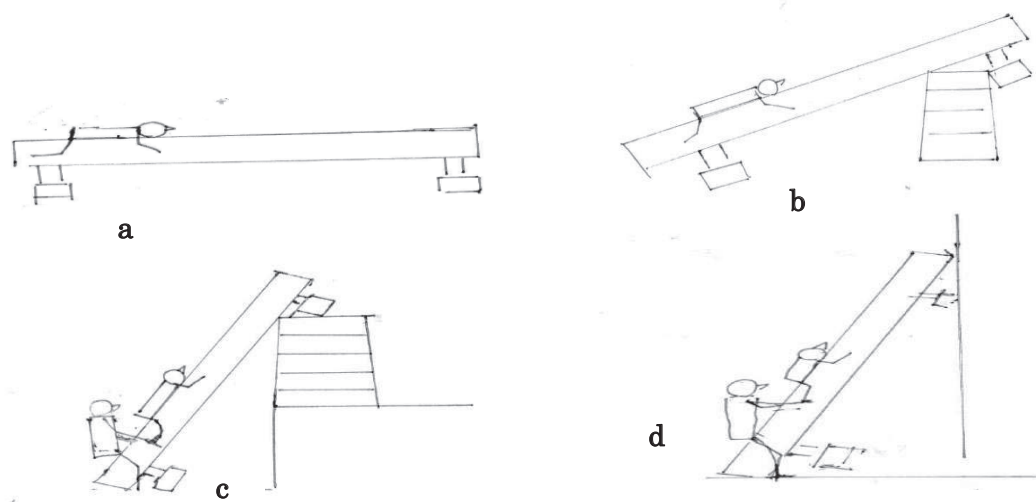


図5：平均台の場の設定（モノレール）

表2：登り棒の達成率

| | 支持が できない | 支持が できる | 一人で 登れる |
|-----|-------------|------------|------------|
| 学習前 | 7 | 10 | 5 |
| 学習後 | 0 | 16 | 6 |

表3：登り棒の好嫌度

| | 好 き | 嫌 い |
|-----|------|------|
| 学習前 | 9 名 | 13 名 |
| 学習後 | 20 名 | 2 名 |

3限目の小単元「登り棒で遊ぼう」では、登り棒から足が地面に付かないようにするだけの支持遊びを行った。これは、おへそをくっ付けて正しく登る姿勢での支持ができるようになることをねらいとしたものである。その後、等間隔に登り棒に様々な色のテープを貼り、どの色テープまで登れるか挑戦させた。これは、登り棒が苦手な子どもでもスモールステップで上に登る達成感を味わうことをねらいとしたものである。

また、これらの身に付けた動きを子ども自ら工夫して行う時間も設定した。

3. 結果と考察

図5-a,bの場の設定までは容易にできる子どもが多くいたが、図5-c,dの場の設定になると自分を支える力が多く必要になり、補助が必要であった。

おへそをくっつけて支持できない子は、学習前は7名であったが全員できるようになった。しかし、一人で一番上まで登れる子は5名から6名ということであまり変化は見られなかった(表2)。おへそを登り棒にくっつける動作ができて、自分の体を持ち上げる筋力がついて

いないためと考える。それを裏付けることとして、学習後は子どもの足を登り棒に挟む補助をしてあげると、おへそを登り棒にくっ付けながら、皆、容易に登れるようになっていた。

身に付けた動きを子ども自ら工夫して行う時間では、図1に示されている様な登り棒を2つ使って足抜き回りをしたり、他の登り棒へ、地面に落ちないように次々に引越したりの遊びの展開例が見られた。

登り棒の好きか嫌いかの好嫌度の調査では好きと答えた児童が9名から20名に大きく増えた(表3)。 χ^2 検定では($\chi^2=24.592$, $df=4$, $p<.001$)であり有意な差が認められた。その理由が「面白いから」「前よりできるようになった」であった。一人で登ることができなくても、支持遊びや等間隔に色付きテープを貼り、スモールステップで達成感が味わえる教材にしたことが意欲を向上させた可能性がある。

また、3時間の学習では、平均台に傾斜をつけて登ることができても、実際の登り棒で自分の体を持ち上げる筋力をつけることができなかった。しかし、登り棒が楽しい・好きという経験をさせることが一番大切だと考える。そうすることで、子ども自身が遊びとして休み時間などに継続的に登り棒に取り組み、登るという動作を培うこととなるからである。

小学校1年生における登り棒の段階的指導法について

引用文献

- 1) 厚生労働省「保育所保育指針解説書 単行本」-2008年5月
- 2) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」2008年10月
- 3) 文部科学省「小学校学習指導要領」東京書籍、2008年
- 4) 森司朗、杉原隆、吉田伊津美、筒井清次郎、鈴木康弘、中本浩揮、近藤充夫「2008年の全国調査からみた幼児の運動能力」体育の科学60(1) 56-66頁、2010年
- 5) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 体育編」, 東洋館出版 2008年
- 6) 文部科学省「小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブック」2011年
- 7) 幼児期運動指針策定委員会、「幼児期運動指針」、文部科学省、2012年
- 8) 橋本妙子、幼児の固定遊具遊び：鉄棒、登り棒、雲梯遊びの観察および運動成就率、横浜女子短期大学研究紀要 1999年、67-76頁
- 9) 柳田信也、幼稚園教師の運動遊びに関する指導理念の調査研究、2008年

付 記

本研究は「小学校低学年における登り棒の段階的指導法について—平均台を使つてのアプローチ」(日本体育学会第69回大会 2018年)において口頭発表したものを再構成したものである。